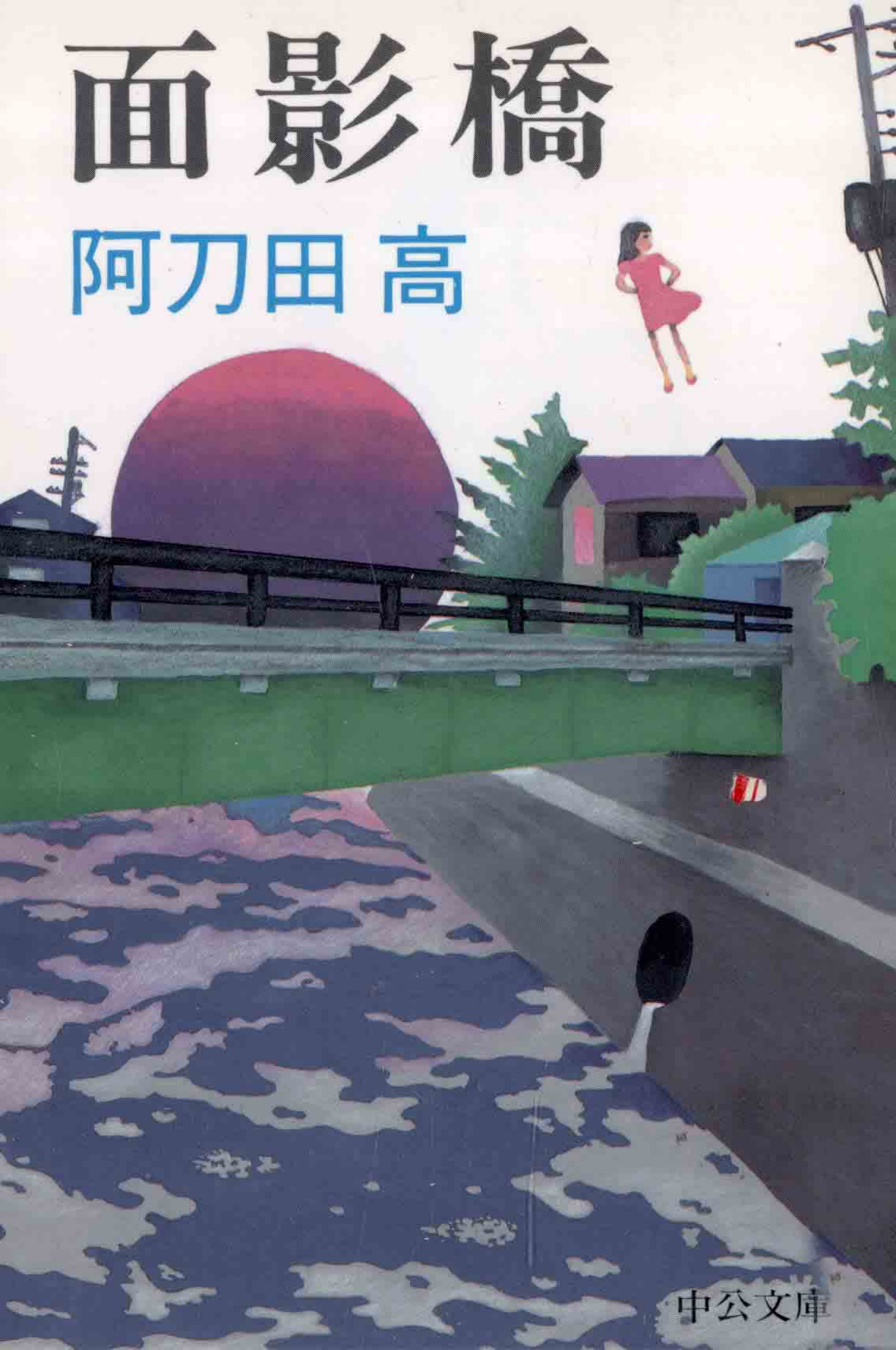


面影橋

阿刀田 高



中公文庫



中公文庫

おもかげぼし
面影橋

定価はカバーに表示してあります

1991年5月10日初版

1998年7月30日再版

著者 ^{あとうだ たかし}
阿刀田 高

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1991 CHUOKORON-SHA,INC. / Takashi Atoda

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-201803-X C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

面 影 橋

阿刀田 高著



中央公論社

目次

第一話	ちらし鮓	7
第二話	白い朝	37
第三話	毛糸玉	67
第四話	たたずむ人	97
第五話	星空	127
第六話	船と少年	153

第七話 鯉

181

第八話 鷺羽山まで

209

第九話 泣き売り

239

第十話 銀婚式

267

第十一話 小春日和

299

第十二話 数え歌

325

解説

唯川 恵

357

面影橋

第一話

ちらし鮓

春子は岸本と会う日の朝、少し早めに起きてちらし鰯を作った。母譲りのメニューである。母は家族の特別な日にあわせて、たとえば誕生日とか卒業式の日のことだが、たいていこれを作っていた。

とはいえ春子は、この料理の作り方を母から習った覚えはない。母は春子が十七のときに他界した。春子はまだ高校生。習いたくても習えなかった。

だから春子の作るちらし鰯は、彼女が自分で台所に立つようになってから本で読み、母の味を思い出して調理したもの。いわば春子の特別料理^{スベシアリテ}。母とは少しちがうらしいが、みんながおいしいと言ってくれる。

たいていの料理は、町のレストランや割烹店で食べることができると、ちらし鰯だけは家庭料理がよい。お寿司屋で食べさせるちらし鰯は、にぎり鰯の種をただ井の上に並べただけのものでしかない。本当のちらし鰯はあれではない。金糸卵を作り、干瓢を煮つけ、鯛田麩を用意し、ほかに椎たけ、筍、さやいんげん、お魚はせいぜい酢につけたひかりものくらい、色とりどりの材料を酢飯の上に飾る。手まひまのかかる料理とってよい。母はもの静かな性格だったが、やるときにはてきぱきとやる。料理人には

むいていたのかもしれない。台所で甲斐甲斐しく働いていた姿が目に見えかぶ。春子は顔立ちも性格も母に似ているらしい。

それとは反対に、父は大ざっぱな人である。長男は最初に生まれたから一郎、長女は夏に生まれたから夏子、次女は春に生まれたから春子、それだけでも性格の一端がうかがえる。父の血を受け継いだのは姉のほうである。

「あんた、よくそんな面倒なもの作るわね」

姉の夏子はちらし鮎を作らない。でも、食べるのは好きらしい。姉にも思い出があるはずだ。

久しぶりにちらし鮎を作り、姉の家にも持って行くことにした。横須賀線で品川まで出て山手線に乗り換えた。姉の家は五反田の駅の近くにある。

もとより姉のためにわざわざちらし鮎を作ったわけではない。六歳上の姉にはずいぶん世話になったが、そこまでのサービスはやらない。

——動機は……不純ね——

いろいろな偶然が重なった。

夫は一昨日から博多へ行っている。週末にならなければ帰らない。五歳になる豊は幼稚園のお泊り会。バスで伊豆のレジャーランドへ行っている。帰りは明後日の昼すぎ。そんなタイミングにスルリと滑りこむように岸本から連絡があった。

「あら、今は東京ですの？」

「先週帰って来た」

岸本の勤務先はロスアンゼルス。東京にいるのはめずらしい。

「しばらくいるの？」

「あさって帰る。会えないかな、帰る前に。明日くらい」

六年前なら、どんなに熱い思いでこの言葉を聞いたかわからない。いくつかの光景が脳裏をかすめる。

「ひどいのね」

「どうして？」

「なんとなく」

春子は電話口で近況を伝えながら思案をめぐらした。

——会えないことはないわね——

夫も子どももいないなんて、めったにあることではない。銀座あたりに出て、ゆつくりとウインドウ・ショッピングでもして歩こうかと考えていた。

——つらいかなあ——

岸本の笑顔が浮かぶ。ちょっとはにかむような、少年みたいな笑い。かつては心から愛した人だった。すべてを捨てて岸本のいるアメリカへ行こうかと思った……。

年月が春子の疵口を塞いでくれたらしい。今なら岸本に会っても胸が騒ぐこともあるまい。楽しいだけのひとときが過ぎせそうだ。ウインドウ・ショッピングよりはましだろう。

「どう、なんとかならないか」

「いいけど、あなたのほうに時間があるのかしら」

「なんとかするよ」

「何時ごろ」

「明日の夕方。ご飯でもどう」

「ええ」

岸本は成田のホテルに泊り、朝早い便で出発するらしい。約束をしたあとで、岸本の好物がちらし鮓だったことを思い出した。飛行機の中で食べてもらおう。

——一晩おいたら、わるくなっちゃうかしら——

なまものを使わなければ、この季節は大丈夫だろう。もともと酢飯は保存食だった。

朝早く起きて用意し、少しおおめに作って姉のところへも持って行くことにした。五反田に四時すぎまでいて、五時に銀座で岸本に会う計画……。姉に、

「何時ごろ来る？」

と聞かれて、

「十二時すぎね。ちらし鮎、作って行くから」

と約束した。

「へえー、ご馳走ね」

姉が五反田に住むようになったのは、去年の秋。引越した直後に春子は夫と二人で訪ねた。そのときは車で行った。駅から歩いて行くのは今日が初めてである。

「五反田駅から裏道を通って広小路のほうへ抜けるの。それが近道よ」と教えられた。

春子にはなじみのある土地ではない。なにも知らないと言ってよい。電車を降り、プラットホームから眺めると、思いのほか背の高いビルが目立つ。銀行の名前が多い。

「すごいよ。ほとんどの銀行があるんじゃない」

と姉が言っていた。姉の夫も銀行に勤めている。

教えられた通りに西口を出て裏道へ入った。ここはあまりきれいな地域とは言えない、古い商店街。暗い路地が切れると、コンクリートの川べりに出た。

——あら——

春子は足を留め、首を傾げた。なにかがおかしい。

行く手には、人がやっと渡れるほどの細い橋がかかっている。その下を黒い鉄管が通っている。幅広いコンクリートの溝の下を灰色の水が流れていた。

驚いたのは、思いがけないところに川があったから……。姉はなんにも言っていなかった。橋だって人が渡るためというより鉄管を通すために作られたものらしい。こまかい金網に囲まれ、通る人は動物園の檻の中を抜けるように見える。

「ちがうわ」

と呟いた。知らない町を歩けば、めずらしい風景に出会うこともあるだろう。そんなことにいちいち驚いていたら、心臓がおかしくなってしまう。めずらしいから驚いたのではなく、むしろ逆だった。

——見たことがある——

戸惑いの理由はこれらしい。

暗い商店街を抜け、道が開けたとたん、川と橋が現われ、その風景になにかしら記憶のようなものが感じられる。

——前に来たのかしら——

そんなはずはない。五反田を電車で通ったことは何度もあるし、車で一号線走り抜けたこともある。だが、こんな路地に来たことはないし、ましてこの角度からこの風景を見たはずはない。それは確かである。

——だれかの絵かしら——

心に宿ったイメージは絵画に似ているけれど、だれがこんな雑然とした風景を絵にか

くのかしら。画題にふさわしいものではない。橋のむこうに倉庫らしい建物が見える。旅館の看板も見える。だれかがひっそりと隠れて暮らしているような、そんな気配がある町……。

——ここじゃないわ。よく似ているけど——
橋を渡りながらゆっくりと考えてみた。

頭の片すみにしっかりと残っていることでありながら、思い出せないのがもどかしい。
——渡ったら、大変——

そんな意識までこみあげて来る。遠い日に見た夢なのかもしれない。覚えはないが、夢にもよく似ている。

そう。これは心理学のテーマなのかもしれない。橋は川にかかっている。川には二つの岸がある。川を挟んで二つの世界が対立している。そうだとすれば、橋を渡るのは、一つの世界からもう一つの世界への躍進、逃亡。なにかしら決意がなければ渡ってはいけない。それは……命がけの決意かもしれない。

——もうあとへは戻れない——

人は一生のうちに何度か、そんな思いでどこかの橋を渡っているのではあるまいか。

——私もそうかしら——

そんな体験があったような気もする。たとえば……初めて岸本の部屋を訪ねたとき。